

第9章

ボランティアに参加して ～ボランティアからの報告～

今回の震災では、まぎれもなく全町民が被災者となった。町の復旧・復興に尽力しているボランティアの中に、多くの町民が存在しているのは述べるまでもない。報告をまとめるにあたり、これら町民ボランティアの声とともに、町内外から参集したボランティアに活動を振り返ってもらった。

- 9.1 さまざまな感情が入り混じった濃密な日々
- 9.2 「やりきれない」気持ちをかかえたまま
- 9.3 全国に広がる七ヶ浜の精神
- 9.4 まだ終わってない……家族に感謝
- 9.5 活動によって救われた自分／七ヶ浜町への期待
- 9.6 つながりがあればこそ、必ず乗り越えられる

9.1 さまざまな感情が入り混じった濃密な日々

七ヶ浜町 松浦 結

高校を卒業した10日後……。

あの日、世界が動きを止めたように感じた。生まれてからそれまで見るともなく見てきた当たり前の景色と日常が何の前触れもなく一変する。疑いのない観念が崩壊するというのは19歳の青年にとっては比類のない衝撃であり、『無常観』という言葉に初めて実感が伴った瞬間だった。

地震の直後からライフラインが全て断絶してしまったため、初めの2・3日は近所の友人達やその家族と身を寄せ合い、食糧や燃料の節約も兼ね共同生活をしていた。朝日とともに起き、日没とともに床に就く生活。風呂に入れず、排泄物は新聞紙に包む。入ってくる情報はポータブルラジオと人伝え。余計なものがない分、時間がゆっくりと流れた。

連絡手段は会って伝え合うしかないため、自然と近所の同級生や先輩後輩が集まりだし、お互いの持つ安否確認や各地の被害状況などの情報交換が行われた。粗方それが済んでしまうとやることが見当たらない。しかし地元の一大事に家でじっとしてられる訳もなく、何か出来ないか、出来ることではないかと皆でウズウズしながら話し合っていると、絶妙なタイミングで近所の顔見知りの町議会議員が通りかかった。「この人なら！」と思いの丈を述べると、社会福祉協議会の事務所にいけば手伝えることがあるかもしれないとの情報を得ることができた。翌日皆で訪ねてみると、ボランティア受け入れ準備でごたごたしているにもかかわらずすぐさま話を聞いていただき、受け入れてもらうことができた。最初の活動は役場での避難所向けの炊き出しで、町職員の女性陣に混ざりおにぎりを握ったのだが、連日ほとんど寝ずに緊急業務に当たっていたようで、少し異様な空気感だった。

次の日からは給水活動の手伝い。水道課職員と町の貯水タンクへ行き給水車に水を補給し、各地区の給水場所へ向かい、町民が持参したペットボトルやポリタンクに水を詰め、空になるとまた貯水タンクへ走り補給の繰り返し。この作業は水道が復旧するまで毎日続いた。冬の寒さの中手足が濡れるため震えが治まらない。紛らわすために仲間たちと冗談を言い合いながら作業を行っていた。この作業をしていると水を貰いに来た知り合いと会うことができ、その度に無事を喜び合った。また「自分も協力したい」と声をかけてくれる友人が一人また一人と現れ、相乗効果でメンバーが増えていった。

初期の災害ボランティアセンターは、学校が軒並み休校になっていた影響で小・中・高校・大学生といった若年層が多かった。救援物資の搬入出ではトラックが到着すると皆で駆けつけ役場職員や自衛官、大人子どもと入り混じって人海戦術で物資を運んだ。力のある大人や学生が重い物を運び、小中学生も軽い物を運んでいた。長い待ち時間には、子ども達が飽きないように皆で一緒に遊んだり絵を描いたりしていた。体力に自信のない子たちはセンターの受付業務や掃除を率先して引き受け、子ども好きの人は子どもたちの遊び相手をする為に児

童館へ、看護学生は看護師に付いて避難所を回り、皆が文句一つ言わずに自分にできることを探し打ち込んでいた。

その後は徐々に大人も増え、瓦礫の撤去、床下の泥かき、汚れた食器や家具の掃除、持ち主不明の写真の清掃、仮設住宅への引っ越し手伝い、集会所での話し相手など活動内容も増えていった。

その中で特に印象深いのは、センター開設直後から一ヶ月程休みなく続いた衣料物資の仕分け班。全国から送られた支援物資が連日次々と到着する。衣料品は町の武道館に運び込まれ、剣道場二面、柔道場一面、さらに廊下までもが天井近くまでダンボールで埋め尽くされた。一箱一箱中身を確認し、種類・サイズごとに分け、数を数え、詰め直していく。進めたそばから新たな物資が届き收拾がつかない。初めから種類ごとに分け箱に詳細な説明書きがあるものは非常に助かった一方、衣類から生活雑貨、食糧品などが一箱で送られてくると一つ一つの分別に苦勞した。女性がほとんどの班で、その忍耐強さが大いに発揮される作業だった。この衣服を一刻も早く避難所の方たちに届けたいと一丸となって励む一方で、地区ごとに公平に行き渡らないと苦情が来るとなどという事情で中々送り出すことができず、非常にやきもきしていたことを覚えている。

多くの方々の善意は本当にありがたく励まされたのだが、中にはボロボロで着られそうにない物や埃の付いた服、古い下着など処分せざるを得ないものも多々あり、辛くなることがあった。

あの頃感じた、一つの状況下での結束の強さと濃厚な信頼感はそれまでの日常生活では見出すことができなかつた魅力的なものであり、故にその後の喪失感もまた大きなものとなり、自分の本来の生活に戻ることに苦勞した。また、多感な時期に非日常を過ごすというのは、成長が促される反面、理不尽や不信感から傷を受ける機会も多く、それが自覚の有無を問わず残ってしまうこともあるように感じる。

そんな喜びと悲しみと怒りと安らぎとが入り混じった濃密な日々の中で得た、年齢も職業も立場も異なる、地元、全国、さらには海外からの多くの人たちとの出会いは、若い私に良くも悪くも大きな影響を与え、今に至る糧となっている。

◆ 松浦結さんのプロフィール

23 歳。七ヶ浜町汐見台在住。震災直後からボランティア活動を開始。「すぱーく七ヶ浜」へのボランティアセンター移設立ち上げ設営に参加。困難を極めた支援物資の仕分け作業のリーダーを担った。父親と共に町民ボランティアとして活躍中。また、他県の被災各地へ赴いて支援するなど活動のフィールドを広げている。

9.2 「やりきれない気持ち」をかかえたまま

七ヶ浜町 佐々木彬聡

私が東京から戻ったのが震災の翌月でした。

初めて町に戻った時、そこには瓦礫の散らかる被災地がありました。「七ヶ浜が被災した」という状況がなんだか腹落ちしなかった記憶があります、頭では理解しましたが、気持ちがついて来ないという感じです。戻ってきた翌日には、自転車で産業道路を走り、路肩に山積みされた瓦礫や、あちこちに放置された廃自動車を覚えています。路面は砂ぼこりにまみれていて、ガラスが散乱していました。

その翌日から私は七ヶ浜町のボランティアセンターに足を運びました。ボランティアセンターには私の兄や、その友人などがおり、存外、明るく働いていた姿を覚えています。

初めの頃に私がボランティアセンターで行った作業は、支援物資の仕分けと分配作業でした。自衛隊の車などから倉庫内へ物資を搬入・仕分けをし、フリーマーケットという形で被災者へ受け渡しを行うというものでした。被災者が、フリーマーケットの始まる4、5時間も前から地面に座って並んでいたことを記憶しています。また、「みな流されてしまっていないだ」と、葬式用の黒い革靴を所望される方が非常に多かったのが印象的でした。

物資関係の作業は、ゴールデンウィークが終わるとだいぶ落ち着きました。発災から2か月後です。思い起こしてみると、ボランティアセンターで活動する人たちの顔に疲れが濃く出ていた時期の様気がします。被災地以外の世の中は、連休でしたから、この時期には訪れるボランティアが増えた記憶があります。私も人に酔うとか、人に胸焼けするとか、そういった感覚を初めて経験していました。

中でも忘れられない出来事があります。私の後輩で、震災直後からボランティアセンターで働いていた男がいます。ある晩、堰を切った様に泣き始め、朝方まで嗚咽をあげながら地面にうずくまっていた様子でした。きっかけは、広島から来たボランティアに誘われ、お酒を口にしたことです。溜まっていたものが、一気に噴き出した様子でした。背中をさすりながら、ずっと語りかけていたことを覚えています。その姿を見たときに、「これまで現実について来ていなかった気持ち」が、なんとなくわかった気がしました。

物資作業の次に、私は自転車修理を始めました。当時は「一人ひとりのできること」に、大きな意味がありましたから、私は手に職を持ったボランティアに教を乞うことが有効だと考えたのです。まずは、埼玉からきていたボランティアに自転車修理方法を教わりました。灰捨て場の瓦礫の山から、使えそうな自転車の部品を調達し、レンタルサイクルの様なことを始めました。その頃は、まだ路面にガラスが散乱している状態でしたから、パンク修理の依頼もたくさんありました。自転車の修理依頼が無い日は、家屋の解体や瓦礫撤去を行って

いました。これが7月くらいまで続いたと思います。

8月のひと月は、私は一度ボランティアセンターの抜け出し、自分の身の回りのことをしていました。大学への休学申請手続きや、借りっぱなしになっていた東京のアパートの解約。そしてお金を稼ぐために大工工事のアルバイトをしていました。アルバイトは、SONY 多賀城裏にある桜木幼稚園の修繕でした。

また、時期は曖昧ですが、「海の学校」というマリンスポーツを振興している団体と縁があり、夏祭りをお手伝いさせていただいたこともあり、「心がほっとする時間を提供する」という目的でした。沢山の子供が遊びにきていたのを記憶しています。

9月になると私は、泥掻き、家屋の解体、瓦礫撤去の作業に専念するようになりました。以降は、毎日同じ様な作業を延々と繰り返していたので、時系列などはかなり曖昧です。ただ、秋から冬にかけては、菖蒲田浜の松林の工事を行った記憶があります。工事車両が進入できるよう、津波でえぐれた林道を平らにし、骨材を撒いて固めるという作業でした。400人規模での作業でした。菖蒲田浜の松林の中にもおびただしい瓦礫や家屋が突き刺さっていたので、林道を修繕しながら瓦礫撤去を行っていました。

翌年の春からは、田圃の瓦礫撤去に取り組んでいたことを覚えています。重機で大型の瓦礫を掘り起し、除去しきれない塵芥を一つ一つ拾っていく作業です。町外ボランティアに対して、申し訳なくなるほどの地道で長い作業でした。そして、私はそれに8月の末まで取り組みました。

尻切れトンボの様ですが、私が七ヶ浜ボランティアセンターで活動した1年半の記録は、以上です。9月以降は、大学に復学するために七ヶ浜を離れました。休学期間の期限がきたからです。

書き出してみるとたったこれだけですが、行間には様々な経験、様々な出会い、これまで感じたことのないような喜怒哀楽があり、私にはとてつもない長さの時間だった様に感じます。私は震災関係のテレビや映像は正直ほとんど見ないようにしていますので、「震災」を久々に見つめ直し、やりきれない思いが蘇ってきました。未だに胸にぐっとくるものがあるということは、結局、色々な気持ちの整理を、置き去りにしていたということなのかも知れません。いまだに真剣に考えると「やりきれない」気持ちがあります。

◆ 佐々木彬聡さんのプロフィール

25歳。七ヶ浜町汐見台在住。東京の大学に通っていたが、震災を機に七ヶ浜に帰省。約1年半、七ヶ浜町のボランティアセンターで復旧作業(瓦礫撤去、家屋解体など)に従事。その後、休学期間の終了とともに復学し、七ヶ浜に関する卒業論文を執筆。卒業論文は、経済学部優秀賞を受賞。現在は、化学薬品メーカーの営業マン。

9.3 まだ終わってない……家族に感謝

七ヶ浜町 土井理弘

・ 3年前のあの時……

私は七ヶ浜に生まれ、この町で育ってきました。この町に家を建て住むことができた私にとって、この七ヶ浜の地域性はとても好ましく、懐かしく、どこかホッとするそんな生活環境として存在していました。

平成23年3月11日、あの日起きた震災と大津波、仕事場が多賀城であったことから、市内の惨状を目の当たりにし、自分の家族のことに思いを馳せながら、働き続けていました。

震災当初のこととして、今思い出されるのは、浸水する沿岸部の町並み、路上を歩く人々、天まで伸びる石油基地の業火、鳴り響く、緊急車両のサイレン。

聞こえてくる言葉は、「寒い」、「家が流され、避難している」、「家族と連絡がつかない」、「友達が死んでしまった」……。言葉もなく横たわる亡骸。

家と職場の往復を繰り返す毎日、メディアから流れる他の地域の惨状が目飛び込み、また、自分の家族が無事であったこと、自宅での生活が保たれていたことから、自分の町である七ヶ浜の状況は、人伝に聞く程度に留まり、比較的無事に推移しているように感じられていたのを覚えています。

震災から、1か月が経過し、何とか自分の時間を持てるようになった頃、思い立ち、徒歩と自転車で七ヶ浜の沿岸部を巡り、自分が住む町の惨状をこの目で見た時、心の中にやり場の無い怒りと、大きな喪失感が去来し、自分の考えの短絡さを恥じました。

・ 初めてのボランティア活動

震災から2ヶ月、震災後の日々の生活に慣れ始め、おかれている生活とただ体を休めることに違和感を覚え始めたある日、「町に住まう人たちに自分に出来ることは何かないのか……」、そんなことを考え、七ヶ浜の災害ボランティアセンターに顔を出しました。

とくに誰かに誘われた訳ではなく、良く調べもせず、今思えば、思いつきとも言える行動で、計画性のないことであったと思います。

その頃のボランティアセンターは、中心で活動していた人たちも手探りで、活動の内容も、被災した人たちから挙げられる要望にひたすら対応していくもので、注意点として指示されていた内容は、「余震の際、すぐ避難できる活動を行う」というものでした。

初めての活動は、沿岸部の住宅の床下に入り込んだヘドロのかき出し。初めて顔を合わせた5人で指示された場所に向かいました。

自宅の中で一人片付けをしていた奥さんに会い、事前に指示のあったとおり、「余震があるかも知れないので、床下には潜れません。床板を剥がしながらいいですか」、そう声をかけると、「……自分ですからもう良い」、涙ながらにそう切り返えされました。

自宅をこれ以上壊されたくない、そんな察するに余りある表情から、安全面から本来してはいけなかったのかも知れませんが、5人で相談し、床下へ入り作業することを申し出、活動を行いました。

2時間近くへドロと格闘し、搬出作業を終え、泥だらけになった私たちに、奥さんから「ありがとう。お疲れ様」と声をかけられ、人の想いにより添う活動の難しさを肌で感じ、他愛も無い感謝の言葉にさえ、涙がこみ上げました。

それからは、時間を見つけ、活動に参加するようになりました。

週末の朝の受付時間は活動人員が数百人を超え、センター内は人だかり、中に入るのが躊躇され、声をかけてくれる知り合いに安心感を覚えるほどでした。

活動の内容は多岐にわたり、体力的に疲れることはありましたが、誰しもが与えられた活動に「NO」ということはなく、帰り際は誰もが「ありがとうございました」と言い帰っていくものでした。

参加されている全ての人から、七ヶ浜町の復興と被災者のため力になるという意思が感じられ、そこには、当初から活動に携わってきた人、新しい人等、分け隔てないある種の充実感が感じられ、私は町の住民の一人として活動を続ける全てのボランティアの仲間感謝する日々が続きました。

・祖父のこと

職場に通い、時間を見つけ、ボランティア活動を終始している日々の中、震災以降、体調を崩し、近隣の総合病院に入院していた祖父が亡くなりました。

ある日、敷地に流れ込んだ和船の撤去と瓦礫の除去作業を依頼され、活動に夢中になり、昼前に携帯電話を確認すると、母親から多数の着信履歴がありました。

折り返し電話すると、「何処で何をしているの。じいちゃん、死んだよ……」、という痛烈な一言、電話を切られました。

生まれてから、事ある毎に手を貸してもらい、見守ってくれ、感謝してもしきれない祖父の間際に立ち会うことが出来なかった事実。

目の前にある状況にもがき、結果、家族に目を向けていない日々が続いていたことに気づかされました。妻と子供にも多大な負担をかけていたこともあり、ボランティアセンターに通わない日々が続きました。

「家族に負担をかけてまで通うボランティアって……」

その後、暫らくしてまた通い始めるきっかけを作ってくれたのは、「無理しない程度であれば、今までどおり通って良いよ。」という家族の言葉でした。

そのときの言葉は、ボランティアセンターに通わなくなった今でも、日々の仕事の中で活きています。「家族に感謝……」。

・ある仲間からの質問

「何故、ボランティアに参加しているの？」

時間を見つけ、ボランティアセンターに通い、活動を続けていた私に、ある日投げかけられた言葉……。正直言葉がありませんでした。

休憩時間の他愛も無い質問だったのかも知れません。しかし、私にとってその言葉は活動に慣れ始めた自分を見つめ直す大きな一言でした。

「家族が暮らす町の復興への寄与」、「被災者への助力」、「大きな被災をしていない住民としての後ろめたさ」、「震災後の仕事場での達成感の無さ」、「ある種の仲間意識」、「感謝されることへの陶醉感」……。色々考え、そもそも、「自分のため？ 人のため？」それすら曖昧なままで活動していたことに気づかされました。

夏が過ぎ、初秋を迎える頃、私が導き出した答えは、「自分、そして家族のため」活動に参加しているというものでした。

町に暮らし、「自分なりに協力できる活動の場」が私にとっての「ボランティアセンター」であり、哀れみや感傷を持つことなく、仲間やたくさんの人の話に耳を傾け、広い視野で考えていく活動こそが、私のおかれていた生活と気持ちのバランスを保つための唯一の指標であったと思います。

・津波で失われたもの

あの日の津波で失われてしまったものは何だろうか。東日本大震災にまつわる文献は、今もいたるところで目にします。今七ヶ浜では、ボランティアセンターの上側に震災当初に見られていた震災瓦礫は3年を経過した今、その姿を消しています。

ボランティア活動中、瓦礫やヘドロをダンプで搬送する作業が続いた時期があります。被災した方のお宅の敷地内に散在する瓦礫類の撤去にあわせ、分別し、瓦礫置場まで運ぶ作業でしたが、その中に含まれる生活の痕跡は、当時の私にとって辛い活動として捉えられました。

割り切って活動に終始しても、写真、指輪、位牌等々被災者に必ず確認しなければならぬものが出てきます。確認するたび、辛い表情、懐かしい表情、涙ぐむ表情など等。

その後に出る言葉が、「捨てて構いません」、であったとき、「活動自体が本当にこの人のためになっているのだろうか」、「やさしさの押し売りになってはいまいか」と疑いたくなったものでした。「ボランティアをしている」、と人に言えなくなり、自分が何も出来ないように思える時期が今も思い出されます。

それでも、活動を続けていられたのは、「ありがとう、お疲れ様」という感謝の言葉が聞こえたからだと思います。

津波は、「美しい景色」、「暖かい家」、「時間」、「尊い命」、「思い出」……、挙げればきりが
ないほど、本当に様々なものを奪い去っていきました。

活動を終え、ボランティアセンターから自宅に帰るときに必ず目にしていた震災瓦礫、そ
の中に見える沢山の人の生活の痕跡が見え隠れし、失われたものの大きさを痛感させら
れました。

今では小高い山が残るだけとなった敷地の前を通るたび、また、コンテナがなくなった海
岸線を見るたびに記憶を風化させてはならないと心に刻んでいます。

・今、思うこと

震災から3年近くたった今なお、仮設住宅で辛い日々を暮しておられる方がいることを知
っている人はどれ位いるでしょう。

「震災はまだ終わっていない」

子どもの通う学校周辺や職場への行き帰り、その思いが頭よぎります。また、仕事柄、他
の地域ではありますが、仮設住宅の訪問を行うたびに、垣間見られる終らぬ震災。

職場の同僚、知り合いの家族、今もなお住み慣れた家を失い、長屋のように立ち並ぶ仮設
住宅に入居する方々が事実います。

町の復興が進み、瓦礫が撤去されるにつれ、何時の日か、仮設住宅を出なければならない
人達が持つ不安と焦りは募る一方ではないでしょうか。

久しぶりにボランティアセンターに顔を出す機会があり、見知った多数の顔が見受けられ、
なんだか懐かしく感じたことがありました。そして、その顔ぶれはこの町に住まう人達であ
ることに心強さを覚えました。

そういう人達は何れも当初からボランティアを続けている顔ぶれで、未だ、続けて参加さ
れているのは、3年経過した今でもその尊い活動の必要性を感じているからでしょう。

ボランティア活動を必要としてくれる人がいるかぎり、その活動に終りはありません。

◆ 土井理弘さんのプロフィール

39歳。セヶ浜町で生まれ育つ。代ヶ崎在住の地方公務員(消防官)。家族5人で暮らし。趣味はツ
ーリングとキャンプ、時間があれば日曜大工も楽しんでいる。夏にはボランティアで着衣泳の指
導も行う。

9.4 全国に広がる七ヶ浜の精神

七ヶ浜町 菊地 満

2011年3月11日、未曾有の大地震。水、電気、ガスのない不自由な生活では、あって当たり前の今までの生活が、いかに便利で快適な生活だったのかを思い知らされました。それでも4月に入る頃には自分たちの生活も落ち着き、元々ボランティアで知り合った二人なので、妻と一緒にボランティアセンターを訪れました。

妻は流された写真や位牌等の洗浄・点字。私は外作業につきました。

最初は広い敷地に集められた家財（家具や家電、タイヤに畳、漁具等）を分別する作業で、道具もなく、ベビーカーなどの車輪のついているものを利用して運んだりしていましたが、とても大変な力作業でした。その後、津波の被害を受けた家屋の家財道具の運び出し、泥かきなどの作業が中心となりました。

人の力とはすごいものだと思います。泥だらけの家財で散乱している家屋も、15人ぐらいで一斉に作業をすると、帰る頃には見違えるようになるのです。

「お父さんが仕事から帰ってここを見たらどれだけビックリすることか」

今でも被災された方のこの言葉が忘れられません。私たちボランティアにとっては、一番のありがたい言葉でした。

4月も半ばを過ぎる頃には多くのボランティアさんが集まってくれましたが、肝心の被災された方からの依頼が少なく、ボランティアさんの作業の振分けが出来ない状況に陥りました。これだけ多くの方が被災されているのにこんなはずはないと、現場をあちこち回ってみました。すると被災された方々は自ら黙々と作業されているか、余りにも大きな被害でまだ手も付けられないという状況で、ボランティアに依頼するという考えが浮かばないという状況でした。

それからは一軒一軒お宅を回ってボランティアの活動の説明をして回りました。すると徐々に依頼も増え、今度は逆に作業が追い付かないという状況になったりして、やがてボランティア活動が定着していきました。

ボランティア活動を進めて行く中で、私は町民ボランティアとしての役割を意識するようになりました。

一つは、被災された方々とお付き合いしながら継続的に活動をしていくということです。「寄り添って」ということではないでしょうか。津波によって泥だらけになった家の中が、家財を運びだし、床を洗い、床下の泥の掻き出し、と少しずつ片付いて綺麗になっていきます。数か月後にお邪魔した時、待望の新しい畳が入り、「お茶でも飲んで行って」と明るい声をお聞きした時は、よくここまでこれたなあ、うれしいものがありました。この笑顔をこ

れまで関わって頑張ってもらった多くのボランティアさんに見せてあげたいものだったと思います。

乗ってきた車やテントで寝泊まりしながら頑張ってくれた方々、往復夜行バスでの日帰りで作業して頂いた方々、神戸での大震災時にお世話になったお返しにと駆けつけて頂いたご夫婦等々、全国からたくさんの方々が思いを胸に抱いて集まって来られました。町民ボランティアとしてのもう一つの役割は、これらの皆さんに七ヶ浜町民として感謝しつつ、皆さんが有意義に活動を全うできるようにと、作業の段取りなどを行うことです。また、七ヶ浜の現状を説明させて頂いたり、作業の帰りには他の地区も案内させて頂いたりもしました。皆さんとは多くの出会いもあり、お世話をするつもりが反対に元気をもらうこともたくさんありました。

ともに頑張った皆さん、地元に戻ってどうされているかなと、時々思うことがあります。

地元に戻ったボランティアの皆さんから何通ものお便りをいただきました。それらの中には、七ヶ浜での活動がきっかけで他の被災地にも出向いて作業してきた方、ボランティアそのものに興味をもち、地元でボランティアを始めたという方、授業参観で七ヶ浜の状況を説明し、父母らと一緒に作成した応援メッセージボードを送ってくれた小学校教師の方などからのものがありました。

皆さん、七ヶ浜での思いを地元にしっかり持ち帰ったんだと、うれしくも頼もしくも思いました。全国はもとより世界各地から集まって一緒に活動した多くの仲間たち。きっと今度は自分たちの地元で、町内で、そして日常生活の中で、七ヶ浜で培ったボランティア精神を発揮しているんだろうと思います。

◆ 菊地満さんのプロフィール

64歳。七ヶ浜町汐見台在住。震災後4月より約1年半、おもに震災復旧作業ボランティアに参加。被災復旧作業、依頼された方との事前打ち合わせ、EM菌散布等の活動。ボランティアを自宅に招いての飲みニケーション活動（のべ50人位?）。現在は被災者支援の一環であるきずな工房木工部の管理運営スタッフとして活動中。

9.5 活動によって救われた自分／七ヶ浜町への期待

多賀城市 佐藤祐樹

ボランティアセンターで救われたのは、地域住民の方だけではなく、ひとりのボランティアとしてもわたしも同じだったという話と、七ヶ浜町の今後への期待を記したい。

○

人は思いがけない出来事に遭遇すると、生理反応として「情動」が発生し、それがしばらくして、意味付けされた「感情」に変わるようだ。感情が喜びや幸福感であれば良いのだが、悲しみや怒りのようなネガティブなものだった場合は大きなストレスを伴い、その心理的負担は身体にも多大な変調を与える。

ストレス耐性を高めるとか、ストレス解消を行うという試みは、ストレスへの正しい対処ではない。これらはストレス反応への一時的な対処方法であり、ストレスの原因そのものを解決するものではないからだ。

3日間しか耐えられなかったストレスを5日間耐えられるように鍛えたからといって、6日目に病気になるなら、ストレス耐性を高める努力はほとんど意味が無い。カラオケや飲酒といったストレス解消行動により一時的に問題から目を逸らしても、ストレスの原因が歴然と存在している限り、心理的負担がなくなることはない。

それでは、ストレスの原因そのものを解決する正しい対処法とは何か？

それは、自発的にストレスの原因そのものを除去する行動を起こすことである。

耐性を高める（我慢強くなる）とか、解消をする（一時的に忘れる）のではなく、本質的な問題解決に自発的に挑戦することで、人間は大きな試練を乗り越えることができる、らしい。

この問題解決を、心理学用語でストレスコーピングというそうなのだが、ここで重要になるのは、そもそも解決可能な問題を選定し、努力することである。努力しても解決できない問題には、対処を試みてもその行動自体がストレスの原因となり得るため、諦めるか、優先順位を低く設定する必要がある。

まとめると、以下のようなことが言える。

人間は、計り知れない災難に遭遇し、打ちひしがれそうになった時、努力の効果が得られにくい問題に対しては時間とともに受け入れるべきものと認知し、目の前の対処すべき問題に自発的に取り組むことによって立ち直る必要がある。

○

わたしにとっての問題解決の手段は、七ヶ浜町のボランティアセンターへの参画だった。

○

東日本大震災において、わたしは幸い、家族も家も失っていなかった。それでも、津波の余波に襲われたり、たくさんの命が奪われる瞬間を目の当たりにしたりした心の傷は大きかった。

未曾有の災害の前に無力感に苛まれていたわたしは、この状況に立ち向かう行動を取る必要があった。まず地元多賀城市のボランティアセンターで活動し、その後、人手不足だと伝え聞いた七ヶ浜町災害ボランティアセンターの門を叩いた。

懼りながら打ち明けるが、この行動は利己主義、エゴだったことを告白する。

何かの役に立ちたいという本来の意図は当然あったわけだが、当時はまずは自分が立ち直るのに必死だった。

その後出会うたくさんのボランティアさんと同じように、当時のわたしは、目の前のできることをしなければ、健康な精神状態を維持することができなかった。

○

ボランティアセンターでは、主にヘドロ清掃や瓦礫撤去、家屋の解体準備、側溝清掃などの引率を担当した。

全国から自家用車や大型バスで自発的に集まってくれるボランティアさんたちを10～50人程度の小部隊に編成し、作業の意義や概要、実際の作業手順、安全管理などの説明をするのだが、この役回りをさせていただき良かったと思うことがたくさんあった。家主さんとボランティアさんとのコミュニケーションの窓口だったことで、大袈裟に言えば、七ヶ浜と世界をつなぐ橋渡しの現場担当、という恵まれた立場だったからだ。

延べ数万人も集まってくれたたくさんのボランティアさん達は、お仕事やご家族などのご自分達の生活があるにも関わらず、時間やお金をやりくりし、世界中から自発的に集まってくれた。彼らも、今回の震災で多少なりとも心に傷を負い、乗り越えなければ、という気持ちだということを感じることができた。

その想いを、短時間のコミュニケーションを通じて家主さんと共有する試みは、間違いなく家主さん達の元気につながられたし、ボランティアさん達の使命感に基づいた貴重な労働力を効率的に作業に投入することに成功したと思っている。

家主さん達は大変な事態に直面し、片付けや掃除や引っ越しや震災関連の申請などの事務的な作業が山積しており、ボランティアの存在は間違いなく心強かったと思う。

一方で、見たこともないほど大勢のボランティアさんが参集してくれることに慣れているはずもなく、心労も溜まっている折、気を遣われたり、気後れなさったりする場面が散見された。

その際、正しい表現かどうかは分からないが、窓口であるわたしは「〇〇さん、ボランティアさんたちはやりたくてわざわざ来てくれているんです、何でも遠慮なく頼んでみてください」などと胸を張って言える立場だった。

このような、運営側にいなければなかなか使えないコミュニケーションの技法を考え、工

夫し、他のボランティアリーダーの方々と共有するという自然発生的な試みは、責任も大きかったが、意義のある活動だったと振り返ることができる。

○

運営側の引率役は多少目立つ役回りではあるが、他のボランティアさん達より偉いということは一切なく、当たり前だが、単なる役割分担の違いがあるだけある。むしろ、毎週のように朝から晩までヘドロだらけになっている生活をしていると、感覚が麻痺してしまうという局面があった。わたしはたくさんのボランティアさんにそのことを教えられ、気付かされ、その後の活動に活かすことができたことに感謝している。

例えば、震災直後の、全壊どころか家屋の基礎しか残っていないような無残な現場での清掃活動の時。

景観と衛生面の回復、危険の除去という目的の他、思い出の品が少しでも残っていないかに留意して瓦礫を撤去する清掃活動なのだが、現場に到着した時、ある老夫婦が家主さんに、「門だったところはどこですか？」と尋ねていらっしやった。塀があったところを乗り越えて敷地に入ろうとしていた引率役のわたしを尻目に、その方々は「失礼します」と声を出し、今は何も残っていない場所から、頭を下げてその敷地に入られた。

頭をガツンと殴られた気持ちだった。

本当の意味で家主さんの気持ちに寄り添うということは、こういうことなのか、と学ぶことができた。

それ以来、ボランティアさん達を現場へ案内するときは、必ず門や玄関があったところから、一礼してからお邪魔することにした。

また、美容院を経営なさっていた跡地での作業。

わたしは残された作業時間とにらめっこし、とにかく効率よく作業することに腐心していたが、あるボランティアの方が廃棄する土嚢袋の中からカットバサミを発見し、「これは！」と感じて救い出し、家主さんにお届けしてくれた。

もしかしたら、その錆びた小さなハサミを何も考えずに土嚢袋に放り投げたのは、わたしだったかもしれない。

家主さんは、その、長年使い込んで自分の手に馴染んだハサミを受け取り、感無量の表情をなさっていた。

瓦礫は「ゴミ」に見えるだけで、全ては生活の証だったものなのだ、と再確認し、効率ばかり追求していた自分を恥じた。

○

前述の通り、わたしが七ヶ浜でボランティア活動をしたのは、利己主義、エゴからの行動だった。

ひとりのボランティアとしては、この活動を通じて、どれだけ地域に貢献できたのかはわ

からないが、少なくとも自分は救われたと実感している。目の前の対処すべき問題解決に没頭することができたからだ。

そして、世界各国から集まってくれたボランティア仲間と一緒にそのことを共有できたことも心から感謝している。

震災はまだ終わったわけではなく、むしろ戦いはこれからだと思われるが、世界中に価値観を共有できる仲間がいるということを実感できた。今後どのようなニーズが発掘されるかわからないが、もし明確な計画があり、それに必要な助けを求めれば、たくさんの人々が協力してくれるはずである。

また、ひとりの被災者として言わせていただけるのなら、ボランティアセンターを通じて集まってくれた延べ数万人のボランティアの方々に、どれだけ励まされたかわからない。まだ水も電気も自由に使えない時に重装備で集まってきてくれた方々の他県ナンバーを見て、どれだけ勇気づけられたか。数年経過しても、被災地を忘れず、大型バスで手伝いに来てくれる方々には本当に感謝している。

人は解決策がわからない時、混乱し、狼狽え、焦燥する。

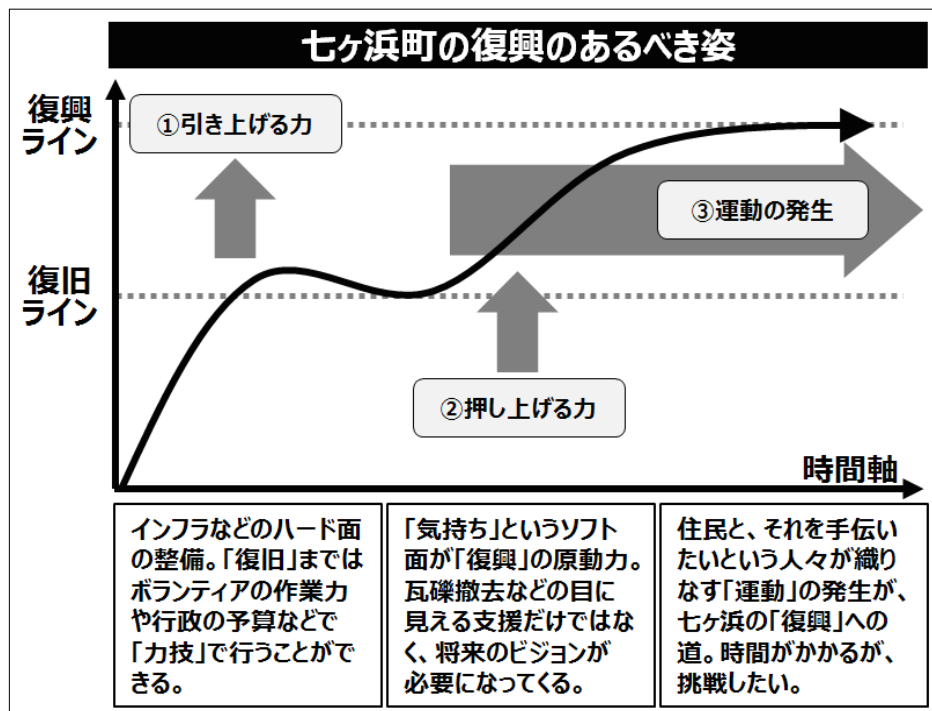
一方で、問題解決策があれば、それに向かって冷静に行動することができる。

ボランティアセンターは問題解決を提供してくれるプラットフォームだと思っている。

今後のセンターの変わらぬ活躍を祈念すると同時に、わたし自身も、出来る限り協力し続けたいと考えている。

○

最後に、今後の七ヶ浜町の復興のあり方について自分の意見を述べたい。



一般的に、どんな組織であっても、ハード面の改革は着手しやすく、予算や労働力さえあれば短期間でも結果が得られやすい。一方で、構成員の心の問題、主に理想や目標を達成するぞという動機付けを促すソフト面の改革は、明確なビジョンの設定とその共有が求められ、時間と労力、根気が必要である。

図の「①」で示した「引き上げる力」は、行政やボランティアセンターの努力によって発揮され、ある程度の「復旧」への見通しは立ったと考えられる。

今後は「②」で示した、「復興」に向けたソフト面の改革による「押し上げる力」が必要ではないかと考えられる。

既に七ヶ浜町は前向きに歩み始めていることが実感としてあるが、これからは、全員が共有する「ビジョン」の構築に目を向けてもいい時期になってきたと考えている。

最終目標は、「③」で示すように、その共通のビジョンに向かって、行政や住民、産業、非営利団体などを巻き込んだ「運動」が発生し、新しい七ヶ浜町が誕生することである。

七ヶ浜町は、住民の方はもちろん、わたしのような近隣住人や、震災後にボランティアとして活動してくれた延べ数万人の方々の心の拠り所となる、自然と思い出が詰まった豊かな町である

ボランティアセンターは、住民の方々や行政、ボランティアさん達、NPO 法人などの情報が一箇所に集まる重要な拠点だと理解している。

今後、ボランティアセンターが真価を発揮し、七ヶ浜の復興を後押しする重要な役割を担うことを心ら期待している。

○

この拙文をお読みくださったボランティアさん各位に対しては、これまでのご協力にかさねがさね感謝するとともに、今後とも継続して支援を頂きたく、心よりお願い申し上げます。

◆ 佐藤祐樹さんのプロフィール

七ヶ浜が大好きな、多賀城市在住の 40 歳。会社員兼大学院生。震災直後から 2 年間、仕事以外の全ての時間と気力を七ヶ浜町ボランティアセンターでの活動に投入。その活動を通じて組織行動論に興味を芽生え、大学院に進学、2015 年 3 月に経営学 (MBA) の学位取得予定。得意分野は経営戦略論と会計学、成員動機付け論。ボランティア活動では、幸運に恵まれ、引率したチームで熱中症や怪我などの事故が一件もなかったことがささやかな自慢。

9.6 つながりがあればこそ、必ず乗り越えられる

千葉市 多々納 誠

50年生きて来た人生において、この3年に及ぶ期間ほど濃い時間は、経験をした事はありません。

2008年の冬、千葉から単身で仙台に着任。そして3年後の3月11日、震災が起りました。

同僚社員に身体的な被害はありませんでしたが、離れて暮らす家族の方には犠牲になられた方もいました。また、一か月近く自宅に帰る事ができず、会社住まいとなった社員も多数いましたので、自分自身が環境的に身軽でもあり、家財の一部を会社に持ち込み、朝夕の食事が取れるように等ケアに努めました。

当時は沿岸部の甚大な被害とはうらはらに、会社も住んでいたアパートも仙台市の中心部にあったため、近いはずなのにどこか遠くの話のように感じていました。自宅のある千葉県もガスタンクが爆発したり、一部の町では津波で犠牲になった方もおられました。

その年、9月に遅い夏休みで自宅へ帰った際、津波被害のあった旭市を通る機会を得ました。実はそれまで被災地を訪れた事がなく、むしろ知人の悲しみを見ていたせいか、あえて足を遠ざけていた感がありました。今思えば沿岸部の状況を報道を通じ、見聞きするにつれ、恐ろしいイメージが膨らみ意識的に避けていたのだと思います。

当時の旭町の印象は、発生から半年が過ぎており瓦礫はないものの、壊れた家屋には板が貼り付けられていたり、ブルーシートが被せてあったりで、大きなダメージが見て取れました。

再び仙台に戻り仕事に忙殺されながら、「会社やアパートから10kmも行けば、更に被害が大きい場所がある。何かに困った人がいる。そして今、自分は此処にいる。このままでいいのか？」という、遅れて来た小さな気付きが、徐々に大きくなっていきましたが、まだ動く事ができない自分がいました。

このタイミングで偶々会社が震災ボランティアの募集を行っている事を知りました。場所は宮城県七ヶ浜町。元来出無精な自分は失礼ながらこの地名を知りませんでしたが、この年の10月、初めてボランティア活動を経験しました。

活動を終え自宅に帰った後、すぐさま活動の継続を考えました。車を持たない自分にとって可能な場所を探しましたが、行き着いた先は偶然にも七ヶ浜町でした。特別なスキルを持たない自分。出来る事は力仕事ぐらいですが、土日祝祭日を出来る範囲で参加させていただきました。

そして年が明け単身赴任の任が解け千葉へ戻る事になり、仕事も落ち着き始めた3月。仲間10数名と再び七ヶ浜へ行き、そこである方にお話を伺う機会を得ました。

再び、子供が遊び・若者が語らい・大人が懐かしく訪れる、浜を取り戻したい。海開きをしたい。故郷を取り戻したい。

熱い思いに心動かされ、以降も継続的に参加させて頂きました。僅かばかりでも自分が関わった事がどうなるのかを見届けたい。

たった1回のきっかけでしたがそれが関わったものの責任と感じ、訪れた回数も今では100日を優に超えました。関わりも七ヶ浜を起点とし、ある時は仲間を通じ他所へもお手伝いすることもあります。

先日、兵庫県丹波市の水害復旧の為、現地で作業をする機会を得ました。当地は以前から七ヶ浜に心を寄せており、自分も幾度か活動をご一緒させて頂いた。そんな御縁もあり唯の1日ではあったが伺いました。その後もたくさんの同志が丹波市入り。七ヶ浜の同志だけではない。他所で知り合った同志も、今も丹波市にお手伝いに行っています。

ボランティア活動は無償でありますし、もちろん何を求めに行くわけでもありません。ただ、参加者は常にたくさんのものを頂いていると思います。おそらくは、他の方も同じ気持ちだと思いますが。

活動を通じた地域との一体感であり、他者との連帯感。災害の悲しみの分かち合いであり、立ち直る喜びの分かち合いである。参加地域への愛情であり、郷土への愛情である。

このつながりがあればこそ、たとえ時間がかかっても必ず乗り越えられる。

そう信じてこれからもお手伝いに伺いたいと思います。

◆ 多々納誠さんのプロフィール

52歳。会社員。仙台に単身赴任中に被災。自宅（千葉県）近くの被災地の状況を目の当りにした事で、勤務先が主催するボランティア活動に参加を決意。以降、個人でも定期的に被災地のボランティア活動を行っている。